

あらかわ



VOL. 17

発行●NPO法人荒川流域ネットワーク編集委員会／編集人●鈴木勝行
住所●350-2201 埼玉県鶴ヶ島市富士見4-13-6 TEL049-286-6088
ホームページ●<http://arariver.seesaa.net/>

CONTENTS

①

高麗川、都幾川、入間川で
稚アユの標識放流を実施

③

Network News

県主催の

入間川の設置された魚道の
現地検討会が開催された
荒川流域一斉水質調査を
6月1日に実施

④

荒川流域再生シンポジウム
を嵐山町で開催した

Network Information

今年度も都幾川、高麗川、
入間川、越辺川で地曳網を
開催

入間川寺山堰での標識放
流作業後、設置された魚
道を背景に集合写真を撮
影。(2014年5月25日)



高麗川、都幾川、入間川で稚アユの標識放流作業を実施

2014年度は、昨年度調査が終らなかった高麗川の上流、都幾川と槻川の上流、そして魚道が設置された入間川の下流域の4ヶ所で堰や魚道等についての遡上調査を行なうことにした。

稚アユの運搬には、
埼玉中央漁協のご協力
で活魚運搬車を使わし

て頂いた。

今年は、秋ヶ瀬堰での稚アユの遡上が遅く、また数も少なかったため、4月29日の標識作業については、江戸川で採捕した稚アユを使用、5月25日の入間川の作業については、いつものように秋ヶ瀬堰で採捕した稚アユを使用した。

4河川のうち槻川を除く3河川については、アブラビレを切除して目印とし、標識アユとして放流した。槻川については、後述するように標識を付けずに放流した。

高麗川と都幾川の標識作業については、江戸川で20kg以上の稚アユが確保できたので、予定通り4月29日に作業を実施す



高麗川の標識放流場所と
調査エリア



高麗川の鹿台堰下流での標識作業風景

ることになった。

標識放流会場は、昨年の調査で遡上標識アユが確認できた最上流部にあたる日高市巾着田の上流部にある鹿台堰の魚道の下流。

当日は、埼玉西部漁協の組合員が6名、また、地元巾着田で活動をしているサポーターズの人たちなども5名参加してくれた。日高市の市長も家族連



高麗川での作業終了後の参加者の集合写真

れで作業の様子を見に来るなど、日高市の人を中心に35名が現地に参集した。

参加者は集合後すぐに生簀を魚道下に2つ設置し、稚アユを迎える準備をした。10時前に活魚運搬車が到着、バケツリレーで稚アユを運搬車から生簀に移した。

参加者は4つのグループに分かれ、生簀から取り出した稚アユに麻酔をかけた後に洗面器に移し、1尾づつアブラビレを切除する作業を行った。

漁協の人は、ヒレ切り時に稚アユが火傷をしないように、道具を用意して作業を試みていた。約2時間半の作業で3,717尾の標識アユを鹿台堰の魚道の下流側に放流した。

稚アユを高麗川から都幾川へ

高麗川での稚アユの搬出作業が終わったあと、活魚運搬車で残りの稚アユを都幾川の会場まで運んだ。

都幾川での標識作業の会場は、昨年度標識アユを確認した最上流部の店下



都幾川の農村文化交流センター上流での標識作業風景

都幾川の標識放流場所と調査エリア



都幾川での作業終了後の子どもたちによる放流作業と参加者の集合写真

堰の上流にあるときがわ町農村文化交流センターの上流。

標識作業に必要な資材は、今年も「もりんど」の山本氏が27日に倉庫から軽トラに積み込み、当日会場へ搬送した。

会場には、比企の川づくり協議会のメンバーや新河岸川水系の人たち、アユ釣の愛好家など32名が参集した。

参加者には、活魚運搬車が到着するまでの時間、自己紹介で、川への関わり、川への思いを話してもらった。

活魚運搬車から生簀までの距離があり、バケツの数も少なく、稚アユの搬送に苦労したが、11時30分頃から4つのグループに分かれて標識作業を開始した。

生簀に移した稚アユに小分けにして麻酔をかけてから、洗面器に移して2時間ほどで作業は終了、上流側に放流した。都幾川に放流した標識アユは4,370尾。稚アユ平均体重は1.45gと小振りだった。

都幾川で稚アユを搬出した後、活魚運搬車は、残りの稚アユを載せ、槻川に向かった。槻川では昨年の調査で、淵山堰下流まで遡上が確認できたが、さらに上流にある関場堰も遡上が困難であるため、その上流に運び、アブラビレを切除せずに、約2kgの稚アユ(約1300尾)をそのまま放流した。槻川では自然遡上がなく、漁協による放流



槻川の関場堰での放流作業の様子



もないことから、そうした手法を取ることにした。

入間川での魚道の遡上調査

入間川では、昨年度県の農村整備課により、菅間堰、寺山堰、浅間堰の3つの堰に魚道及び遡上補助施設の設置工事が行なわれた。増水等により菅間堰の施設は完成に至らなかったが、上流側の寺山堰と浅間堰の魚道については、一応の完成をみた。

今年度は、二つの堰の魚道について稚アユの遡上状況を調査し、それらの魚道の改善、及びこれからの事業に生かす知見を得るために寺山堰の下流から標識放流することにした。

最初、5月6日に標識作業と放流直後の1週間の魚道等での遡上調査を予定していたが、県の内水面漁場管理委員会水産担当から特別採捕の許可が下りず作業を断念、5月25日に延期した。

5月の後半になると稚アユの遡上も少なくなり、予定量を確保できるか心配されたが、なんとか稚アユ7kgを秋ヶ瀬堰で捕獲することが出来た。

当日会場には、川越市、鶴ヶ島市の活動団体の人、新河岸川水系の人のほか、東京環境工科専門学校の生徒たちなど34名が参集した。

8時50分に活魚運搬車が秋ヶ瀬から到着し、堰の下流に設置した生簀にバケツリレーで稚アユを移し、4つグ

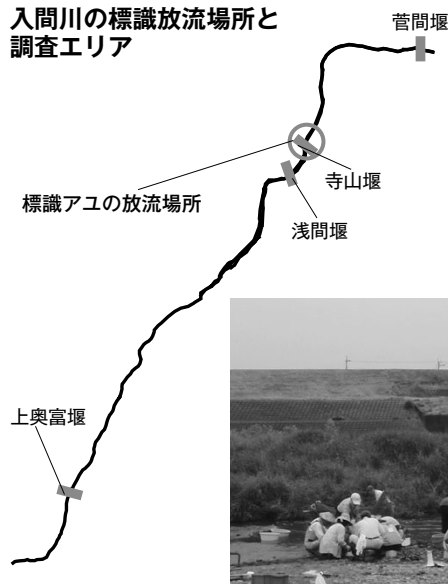
槻川の放流場所と調査エリア



ループに分かれて標識作業を行った。2時半ほどで作業を終了し、寺山堰の下流へ放流した。

1日の捕獲数が少なく、生簀での保育期間が長くなり、標識作業時に

入間川の標識放流場所と調査エリア



入間川の寺山堰下流での標識作業の様子

936尾の稚アユが死んだため、放流数は2,066尾と少なめだった。

放流二日後の調査では、浅間堰下流で、標識アユが群游しているのが、水中カメラによる調査で確認された。

これから高麗川では、7月31日までは友釣と水中カメラによる調査、8

月1日からは、投網による調査を行なう。都幾川は全域が友釣専用区のため、友釣と水中カメラによる調査行なう予定である。槻川は、投網が解禁になる7月1日から調査を開始する予定。

入間川については、入間漁協管理区間は、7月31日までは友釣と水中カメラによる調査を行い、投網解禁の8月1日以降は投網による調査を実施。また、武蔵漁協の管理区間では、地曳網を使った調査も予定している。

標識アユの捕獲した場合は、以下のところまで情報もお寄せ頂ければ幸いである。

携帯 090-7804-5722 (鈴木)

E-mail: k_suzuki@pk2.so-net.ne.jp

NetWork News 1

入間川の堰に設置された魚道と遡上補助施設及びこれから設置される狭山市の堰の現地検討会が開催された。

6月20日、昨年度工事が一応終了した寺山堰の魚道と浅間堰の魚道と遡上補助施設、及びこれから魚道設置が予定されている上奥富堰、田島屋堰、笹井堰に対する現地検討会が県の東松山農林センターの主催で実施された。

検討会には、東松山農林センターの職員の他、笹井堰を担当するコンサルタント会社から3名、アドバイザーで国土土木研究所の村岡氏、県の環境科学国際センターの金澤氏、流域再生プロジェクトのメンバー3名などが参加した。

最下流の菅間堰の魚道については、増水が続いたため、工事が遅れ、まだ基礎部分しか完成していないということで、今回、検討の対象から外された。

当日は増水のため、平水時の魚道の状況を確認することは出来なかったが、今までの調査をもとに、稚アユだけで



工事が終了した浅間堰で改修点の検討を行う

はなく、大型魚の遡上も可能な環境の設置や落ち込みの解消についての提案を行なった。

今年度魚道が設置予定だった狭山市の上奥富堰は、3度目の破損事故が起こり、改修中だった。そのため計画の見直しの必要ができて、今年中の工事の着工の見通しが立たなくなったようだ。魚道の設置計画にも制限が多くなり、極めて難しい状態になりつつある。

上奥富堰の災害復旧対策事業は、河



笹井堰で魚道下流側での遡上施設を検討した

川環境からみると遡上環境の悪化をより深刻にした状態で固定することになり、問題が多いと思われる。

これから計画が作られる笹井堰については、白紙の状態から検討が行われ、現在ある魚道が利用できるように3ヶ所に遡上施設を設置する方向で話がまとまったが、詳細設計はこれから作られる。私たちネットワークはより良い魚道にするために提案し、協議を続けていきたいと思う。

NetWork News 2

20年度目を迎えた荒川流域一斉水質調査。290ヶ所の調査ポイントで実施

荒川流域では、今年度全国一斉の調査日より1週間早く、6月1日に一斉水質調査を実施した。1日までは渇水状態で、水質調査の数値が高い状態だったが、一週間後の8日は増水のため水質状態が大きく変化したため、今年度

については、期日が異なる場合は、比較検討が難しくなった。

今年は新たに比企の川づくり協議会が加わり、27団体、2個人で調査を行った。これからデータをまとめ、年末までに水質マップを作成する予定である。



2013年の高麗川栗生田堰での取水の様子。

NetWork News 3

「天然溯上のアユで溢れる流域の再生を語る」を テーマに荒川流域再生シンポジウムを開催

第18回荒川流域再生シンポジウムは、嵐山町にある国立女性教育会館で68名が参加して開催した。

最初に、標識アユの遡上調査を指導している環境科学国際センターの金澤氏から平成25年度の調査結果と5年間の調査結果の報告がなされた。

25年度の遡上調査では、高麗川は2号堰で放流して鹿台堰まで、越辺川は久保堰から放流して越生本関まで、都幾川は宮ヶ谷戸前堰の上流から放流して店下堰まで、槻川は標識を付けずに青山堰上流から放流して淵山橋まで遡上したことを確認したと報告された。

5年間の調査結果として、魚道等の設置が必要な取水堰についての報告があった。入間川の矢嵐堰、小瀬戸堰、越辺川の中山堰、株木堰、久保堰、越生本堰、高麗川の中里堰、5号堰、都幾川の矢来堰、宮ヶ谷戸前堰、店下堰、関根大堰、槻川の青山堰、淵山堰、関場堰などの名前を挙げ、環境改善の方法についての提案も行なわれた。

2番目に、渡邊水質担当理事から25年度の一斉水質調査についての報告があり、その中でとくにECの数値が高かった飯盛川の経年変化を取り上げて、調査結果の評価が行なわれた。

3番目に新河岸川でのアユの再生活動について、南部漁協朝霞支部の佐藤正康さんから報告がされた。

アユの産卵場を調べた結果、アユは

予想外に住宅地に近い細流でも産卵していることが分かったということだった。また、新河岸川水系での落差工が、アユや他の魚類の遡上を阻んでいる状態を、自ら撮影した映像で紹介した。

最後に埼玉県東松山農業振興センターの岩上氏から入間川での遡上環境補助施設及び魚道の設置事業について報告があった。

現在今年度中の工期で菅間堰、寺山席、浅間堰の3つの堰で工事が進められている。そのうち菅間堰は、水が引かないため粗柱ブロックの設置等の工事に着工できないという。寺山堰については、棚田式魚道がほぼ完成、浅間堰についても土砂吐け下の水位を上げるプールと左岸側の棚田式魚道は完成しているということだった。

報告の後、みずかけサロンに移り、以下のような意見が出された。

意見1 人間が川を利用してきたことでアユの遡上ができなくなった。河川環境を復元するには、利害関係者の調整が大きな仕事で、魚道設置をした場合管理費を誰が負担するかが、課題になる。

意見2 農業用の取水が問題になるが、環境用水についての水利権はないのか。取水する場合には高さではなく、流量を問題にするべきで、ヨーロッパではそうした考え方が一般化している。上流側から流水取水するように考え方



金澤氏の報告に耳を傾ける参加者

を変える必要がある。

意見3 入間川の特徴は礫河原であるが、上奥富堰から笹井堰の短い間に5つも堰や床固め工があり、礫河原が形成されない。礫河原を復元するには、荒川本流にある六堰のように堰を統合し、堰の間隔を長くした方がいい。

意見4 昨年不老川で2ヶ所、水涸れにより水質調査ができなかった所があったが、全国一斉水質調査でも、52ヶ所で瀬切れにより調査ができない所があった。下水道処理水を利用する等の対策が必要ではないか。

意見5 明戸の落差工に設置されている魚道の入口に落差が発生して、魚の遡上が困難になっている。対策は取れないだろうか。

また、NPO団体による河川環境の保全活動を国が支援するシステムを作ろうとする河川協力団体制度について質疑応答があった。画期的な試みだが、まだ試行錯誤の状態のようだ。

今回サ論で出されたご意見を参考に、今後の活動を進めていきたい。



昨年、都幾川の二瀬橋で開催した地曳網の様子

NetWork Information 1

今年も地曳網を都幾川、高麗川、越辺川 さらに調査を兼ねて入間川でも開催。

今年度も4河川で親子を対象にした地曳網体験事業を8月と9月に実施する予定である。入間川については、アユの標識放流調査を兼ねて武蔵漁協管内で実施する。天候に左右されるためいい条件のもとで開催できることは決して多くはないが、毎年楽しみにして参加してくれる親子もある。

各河川での開催予定は以下の通り。

8月10日(日) 嵐山町の都幾川二瀬橋。時間10:00～14:00

8月24日(日) 日高市の高麗川獅子岩橋。時間10:00～13:00

8月30日(土) 川越市の入間川東武東上線鉄橋。時間10:00～13:00

9月14日(日) 鳩山町の越辺川石今橋。時間10:00～13:00

参加費は大人1,000円子ども500円。

捕れた魚は、味覚で川を知ってもらうために参加者に試食してもらう。

参加を希望される方は、090-7804-5722(鈴木)まで。

編集後記

今年荒川流域ネットワークは20年目の活動に入った。活動のテーマも水質調査から河川環境の改善と広がってきた。NPOとしての社会的責任も次第に重くなりつつあることを感じている。今年もこれから川の季節を迎え、流域の団体の皆様と一緒に、地曳網や魚捕りの体験を通して、カワガキや川のファンを増やしていきたいと思っている。(鈴木)